

Relief

リリーフ

2014
April

vol.15

特集
いのちのセミナー



公益財団法人

JR西日本あんしん社会財団

JR-West Relief Foundation

平成 26 年 3 月 21 日（金・祝）に、松下IMPホールにて「いのちのセミナー」を開催しました。

あしなが育英会 東北事務所長の林田吉司さん、聖学院大学 全学教授（平成 26 年 4 月 1 日より学長に就任）の姜尚中さんをお迎えし、「いのち」についてお話しいただきました。

特集では、セミナー後に行った姜尚中さんのインタビューと、林田吉司さんのご講演の様子をご紹介します。

Interview



カン サン ジュン
姜 尚中
Kang Sang-jung

1950年、熊本県熊本市に生まれる。国際基督教大学準教授、東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授などを経て、現在聖学院大学学長、東京大学名誉教授。専攻は政治学、政治思想史。テレビ・新聞・雑誌などで幅広く活躍。主な著書に『マックス・ウェーバーと近代』、『オリエンタリズムの彼方へ』、『ナショナリズム』、『東北アジア共同の家をめざして』、『増補版 日朝関係の克服』、『在日』、『姜尚中の政治学入門』、『ニッポン・サバイバル』、『愛国の作法』、『悩む力』、『リーダーは半歩前を歩け』、『あなたは誰？私はここにいる』など。共著に『グローバル化の遠近法』、『ナショナリズムの克服』、『民主主義の冒険』、『戦争の世紀を超えて』、『大日本・満州帝国の遺産』など。編著に『在日一世の記憶』など。小説『母一オモニー』、『心』。最新刊『心のカ』。

「変えられるもの」「変えられないもの」

—今回、「リスク社会の絆といのち」という演題でお話しいただきましたが、改めて、私たちの社会の現実と、リスクにどう向き合うかについてお聞かせください

例えば病院に行って、「あなたはこういう病気です」と言われたとします。そこで、治療についての説明などを受けます。医者は、患者の心身の負担や薬の副作用などといったリスクをいかに低減しながら治療を進めていくか、という話をしなければならぬのに、患者は専門的な知識を持っていないためになかなか理解が出来ない。とはいえ、医者は医療の専門家ですから、患者は信頼して命を預けるわけです。

私たちは、専門家やエキスパートへの信頼により動いています。物事が高度になればなるほど、専門家に頼らざるを得なくなる。

リスクは、人間の力で「変えられるもの」と「変えられないもの」とに分かれます。ですが、予備知識を持たない人にはその見分けがつかず、「これはこう出来たはずなのに、どうしてしていないのか」という話になってくる。ですから今後は、一般の人でも分かるように説明が出来る人や言葉が必要になってくるのではないのでしょうか。そうすれば、何かリスクが起きた場合にユーザーはある程度納得することが出来る。逆にユーザーも、前もって受けた説明をもとに、起こりうるリスクについて考えていかなければならないのだと思っています。

しかし、リスクを最小限に抑えるために作られたシステムが同時にリスクを生み出し、そのリスクをより小さくするためにまた新しいシステムを生み出し、それがまたリスクを生み出すという、いわばイタチごっこを繰り返していかなければならない。そしてこのリスクの僅か1ミリの違いによって大きなダメージを受け、尊いいのちが失われてしまう。これは非常に脆弱な、私たちの社会の現実なのです。

そういった中で、3月11日に発生した東日本大震災のように、人間の想像を超えた自然災害と人災がミックスされた大災害は、多くの人々の尊いいのちを奪った、変えることの出来ない恐ろしい現実として、私たちに覆いかぶさってきました。

私たちは今、「どうしても変えられないもの」、「二度とあってほしくないもの」をどうやって受け入れていけば良いかという問題に直面しています。

—変えられないものをどう受け入れていけばよいか、という答えは一人一人違ってくと思いますが、受け入れられるきっかけというものはあるのでしょうか

あります。生きていく中で何かにつまずくと、常に振り出しに戻ってしまう。だから歳月が経っても解消されない。解消していくには、起きた物事を語り継ぐ、受け継ぐということが必要なんです。僕も時間がかかったけれど、自分が語り継ぎ、それを受け継ぐ人がいれば非常に慰められる。何年経ったからおしまいというものではなくて、語り継ぐことを続けていく。話すことを聴く人、普通はカウンセラーであったりしますが、そうではなく、傍らにいて聴いてくれる人を見出すことが出来ればものすごく違ってきます。変えられないことが深いところにあることで、自分を支えられているという面もありますが、違う支えを自分で見つけ出していかなければならないのだと思います。

—講演の中で、東日本大震災の被害を数字で表す報道に、違和感を持たれたという話をされていました

被災地で瓦礫と称されるもの一つ一つには、生きていた人々の痕跡、人間のしるしがはっきりと遺されていました。それを前にしたとき、統計的な数字でカウントされていく報道に強い違和感を持たざるをえなかったのです。

東日本大震災も、10年後は統計上の数字で語られると思います。しかし、人間の記憶は数で表されると忘れるのが早い。その後には、「そういうものか」と刻まれていってしまう。

こういった表現で伝えられるかということ、本来は文学なんです。戦争を経た後の戦争文学が出てくることと同じように、震災を表すことの出来る金字塔のような文学の主人公がいるだけで変わってくる。

日々生きていくことが精一杯という人が多い中でも、ある一つの具体的な人格を持った誰かが物語の中に生きていと、ものすごく違う

と思うんです。

阪神淡路大震災では、そういった主人公が創られなかった。震災後19年と言われていながら、関西地区以外では急激に忘れられているんです。

僕が東日本大震災の被災地へ入ったのは、震災発生から2週間後でした。東日本大震災といっても、仙台や三陸、福島ではかなり被害の状況が違います。それぞれの地域の中でも被害の度合いが全然違って、非常に個別化されている。そこに原発事故も加わって、更に復興が難しい状態になっています。

ただ、せめて仮設住宅から移れるようにということは出来ますから、いろんな支援をしていくことが必要です。

3年という年月は節目とされ、通過儀礼のように過ぎていってしまいがちです。被災地に貢献している団体が、今後も継続して支援をしていく。そういったメッセージを発信していただけても違ってくると思います。



「語り継ぐ、受け継ぐ」

—最後に、先生にとって「いのち」とはどのようなものかお聞かせください

僕は息子がいなくなって、血の流れからすれば止まってしまったわけですね。

今日のセミナーで「語り継ぐ、受け継ぐ」という話をしましたが、今は、血縁でなくても自分の考えのDNAのようなものを誰かが継承

していけば、それは続いているんじゃないかと思うようになりました。

「心」という本を書いて良かったと思うことは、自分の書いたものをたくさんの方が読んで、語り継いでくれること。多分僕が亡くなった後も読んでくれる人がいて、僕の考えはその人たちに繋がっていく。

そして、文字に残さない人は自分の友人や傍らにいる人に思いの丈を語り、その思いは受け取った人に繋がっていく。だから「いのち」というのは「繋がっていく」ということなのではないでしょうか。

ある自分の考え方を受け取って、それを伝えてくれる人がいればよい。受け継ぎ伝える、流れ連なっているということが「いのち」なのではないでしょうか。

「3年10日、東日本大震災の遺児たち」



はやし だ よし じ 林田 吉司

大学時代、街頭募金の交通遺児育英募金に従事、卒業後は財団法人交通遺児育英会職員、主に遺児の大学生と起居を共にする生活を経た後、あしなが育英会事務局長。阪神大震災遺児のケアハウス「神戸レインボーハウス」初代館長、東京にある「あしなが心塾レインボーハウス」館長などを歴任し、あしなが育英会東北事務所長。

私たちは東日本大震災の一ヶ月後、被災地の小・中学校、高校を全て回り、親を亡くした子どもを探し出すためのポスターを貼りに行きました。結果、0歳から大学院生までの2,083人の遺児を見つけ出し、2,821,964円の寄付金をお渡しすることが出来ました。

震災から3年と10日が経ちました。「もう3年経ったんだから」と言う人もいますが、逆だと思います。家族がいなくなった。色々なものがなくなった。そして明日も悪いことが起こるかもしれないと、物事を悲観的に思うようになってしまった。プラスのことが無い状態で毎日過ごしている今の方が辛い、とも言えるのではないのでしょうか。

被災地では、100人が100通りの辛い体験をしています。3年経ち5年経ち、今はまだ表面の部分だけでしか見えていない心の傷が、これからたくさん出てくるのではないのでしょうか。

「黒い虹の絵」をご紹介します。これは阪神淡路大震災の遺児が描いたもので、この絵を見たことで、学校へ行ってもらうことよりも、心のケアをやるべきではないかということに気がつきました。レインボーハウスという名前は、この黒い虹が七色の虹になるようにという願いを込めてつけられたものです。

東日本大震災が発生したとき、神戸の時と同じ状況になると察して、被災地へ駆けつけました。500kmにわたる広大な地域にレインボーハウスを5箇所建てようと思い、3年経った今、陸前高田、石巻、仙台に建てる事が出来ました。レインボーハウスで、10年、20年と地道に、遺児たちを見守り続ける活動をする事によって、必ず何か少しでも力になる事が出来ると思っています。

ボランティア活動のために来て下さった大阪、神戸の皆さん、東北の方々に代わってお礼を申し上げます。どうか今後も、子供たちのことを心の片隅で思っていてください。

皆さんの思いは必ず通じると信じています。



黒い虹の絵



今回のセミナーには、会場の定員を大幅に超える、たくさんのご応募をいただきました。ご参加いただいた方々のアンケートでは、「あしなが育英会の街頭募金は知っていたが、レインボーハウスの話は初めて知った」「被災地の現状を知り、今一度3月11日のことを考える良い機会になった」「心に染み入る講演だった」「これからの時代、生きることや生きがいについて深く考えさせられる講演だった」といったご感想を多数いただきました。

今後も、様々な角度からの『いのち』のお話を皆さまの心にしっかりと届けることができるようなセミナーを開催していきたいと思っています。

今年も開催！救急フェア

JR西日本と当財団との共催により、駅等をご利用される方々に一次救命処置（ファーストエイド）の重要性を広く知っていただきたいとの思いから、救急フェアを開催しています。

平成22年度から25年度まで、近畿2府4県におけるJRの駅を中心に、のべ32駅で開催し、1万人を超える方々にご来場いただき、心肺蘇生法やAEDの使用法などを、約2千5百人の方々に体験していただきました。

体験された方々からは、「体験できて良かった」「これで少しは自信がついた」「これからも続けて欲しい」といったお声を数多くいただいています。

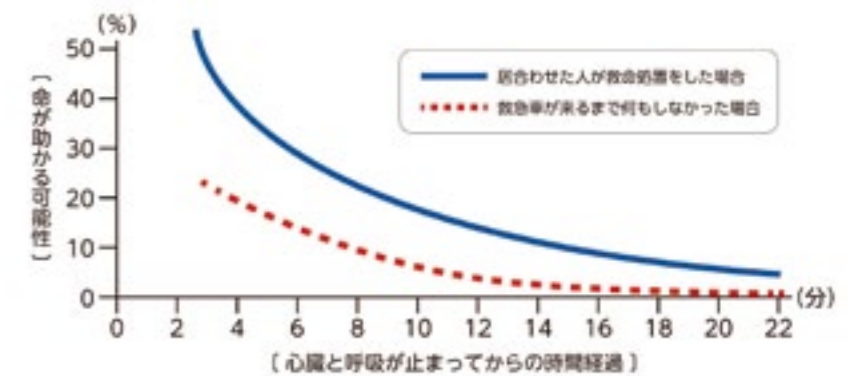
平成26年度も、12駅で「救急フェア」の開催を予定しています。

いざというときに、少しの知識とわずかな勇気で助かる『いのち』があります。そのことを、少しでも多くの方に身近に感じていただきたいと思っています。

■ その場に居合わせた人による迅速な救命処置の必要性

右の図は、「ドリンカー博士の救命曲線」と呼ばれるグラフです。これは、心臓と呼吸が停止してから心肺蘇生法を開始するまでの時間によって変化する、命が助かる可能性を表しています。

この図から分かるように、心臓と呼吸が停止してから救急車が到着するまでの間に、その場に居合わせた人が救命処置を「した場合」と「しなかった場合」とでは、命が助かる可能性が大きく変わります。



Hoiberg M: Effect of bystander cardiopulmonary resuscitation in out-of-hospital cardiac arrest patients in Sweden. Resuscitation 2000; 47(1):59-70. から（改定）

ドリンカー博士の救命曲線



（平成25年度の救急フェアの様子）

■ 平成26年度 救急フェア開催予定箇所

開催日	開催箇所	開催日	開催箇所	開催日	開催箇所
5月17日（土）	三田駅	9月6日（土）	草津駅	10月4日（土）	高槻駅
5月24日（土）	吹田駅	9月13日（土）	宝塚駅	10月18日（土）	尼崎駅
6月7日（土）	和歌山駅	9月14日（日）	奈良駅	10月下旬	調整中
6月28日（土）	姫路駅	9月下旬	調整中	11月2日（日）	京都駅

平成26年度 公募助成先(活動・研究)決定

平成26年度公募助成の助成先が決定しました。

審査の結果、応募総数123件のうち、活動助成27件(1,616万円)、活動助成(特別枠)14件(886万円)、研究助成13件(2,398万円)の計54件(4,900万円)が採択されました。



平成26年度公募助成 助成先の皆様



各助成先からのスピーチ



交流会での様子

3月24日には、採択となった団体・研究者の皆様が一堂に会し、ホテルグランヴィア大阪にて贈呈式を執り行いました。贈呈式では、それぞれ活動や研究に向けた決意や抱負など、熱のこもったスピーチをしていただき、お互いに刺激を受けられたとのお話をいただきました。

また、贈呈式の後に開催された交流会では、方向性の近い方々による今後のコラボレート計画のお話など、資料を片手にお名刺の交換を盛んにされ、そばで伺っていた私たちスタッフも期待の膨らむ場となりました。

これから皆様方のイベントや活動の様子を拝見できるかと思うとワクワクするひと時でした。

各団体のイベントや活動内容は、今後、広報誌やホームページなどでお知らせしていきますので、ご期待下さい。

防災・減災に関する活動および研究

	テーマ	団体・研究者名
活動	兵庫県佐用町久崎における災害ツーリズムのための人材育成	関西学院ヒューマンサービスセンター
	第5回全国学生防災書道展	特定非営利活動法人 健康まちづくり推進協会
	つながるMarche! 2014 防災ブース運営事業	特定非営利活動法人 Salut
	「たのしくて、たのしい。」毎日使えて非常時にも役立つミニ太陽光発電をつくるワークショップ	特定非営利活動法人 循環共生社会システム研究所
	防災・防犯まちづくり 「みんなでつくる災害に強い環境づくり」	特定非営利活動法人 震災から命を守る会
	「聖和防災ふえすた」	聖和寄り合いまちづくり
	丹波市防災会 防災啓発活動	丹波市防災会
	地域と環境を守る「つみっく」防災スクール(災害時のプライベート空間作り)	特定非営利活動法人 つみっくらぶ
	全国実施可能な汎用性のある減災プログラムの開発	一般社団法人 72時間サバイバル教育協会
	災害時の病院ボランティア活動の推進	特定非営利活動法人 日本病院ボランティア協会
	地域防災力を高める避難所開設・運営訓練の支援活動	日本防災士会奈良県支部
	レッドヘアサバイバルキャンプ	特定非営利活動法人 プラス・アーツ
	みんなで作ろう! 防災かまどベンチ	平群町ボランティア連絡協議会
	マイクロ水力で地域の交流を生み出す防災拠点「吉野見附三茶屋」づくり	三茶屋自主防災会
研究	六荘地区防災フェア~2014地域の絆が命をまもる~	六荘地区地域づくり協議会
	保育園児などに対する従来にない新しい防災啓発活動	特定非営利活動法人 和歌山県木質資源開発機構
	災害に備える	特定非営利活動法人 和歌山レスキューサポートバイクネットワーク
	近代大阪人の災害意識:津波におびえた人々の行動の背景をさぐる	大阪歴史博物館 飯田 直樹
	大規模広域災害時における鉄道利用者・沿線住民向けの「安全あんしんマップ」の開発	神戸市立工業高等専門学校 宇野 宏司
	情報機器としてラジオを活用した避難所内情報配信技術の提案と検証	和歌山大学 塚田 晃司
	津波災害時における消防機関の活動継続体制についての研究	関西大学 永田 尚三
	列車からの避難訓練における住民連携の意義と実態・課題に関する比較分析	和歌山大学 西川 一弘
	在宅ハイリスク療養者のための災害時セルフケアプランモデルの作成	神戸常盤大学 畑 吉節未
	船舶ビッグデータを用いた津波早期検知・通報システムの創成	大阪大学 牧野 秀成

平成26年度公募助成先(活動・研究)テーマ一覧 (五十音順、敬称略)

事故や災害による、心身のケア等に関する活動及び研究

	テーマ	団体・研究者名
活動	遺族の悲嘆を分かち合い・ささえあい・助け合って前向きに!!	特定非営利活動法人 遺族支援愛ネット
	大切な人を突然亡くしたおとなたちへの包括的支援構築事業	特定非営利活動法人 <リーフ>サポートハウス
	遺族支援	グリーフサポート ラル大津
	東北ボランティアプロジェクト	神戸親和女子大学文化総部 ユネスコクラブ
特別枠	家族や愛する人を失った方々を支える	はずの会
	福島県浜通り地方からの避難者の西日本における交流活動	一般社団法人 関西浜通り交流会
	県外避難の子どもたちの学習支援活動と幼い子どもの母親支援	関西学院大学災害復興制度研究所
	人と人が繋がる「福島・たんごスプリングキャンプinふくしま」&「福島・たんごサマーキャンプinたんご」	特定非営利活動法人 たんご村
	被災地の心身障害児を対象とした宿泊体験	奈良精神科作業療法勉強会
	みちのくだんわ室(東日本大震災による県外避難者さんの癒しの場)	東日本大震災・暮らしサポート隊
	海の虹プロジェクト 2014 in京都	東日本大震災復興支援 京都生協職員ボランティア
	福島キッズ・アートワークショップ プロジェクト	ポーンフリーアートJapan
	レクイエム・プロジェクト南相馬2014、レクイエム・プロジェクト北いわて2014	レクイエム・プロジェクト実行委員会
	研究	災害対応と救援者のストレス-平成23年台風12号災害における行政・消防職員の事例から-
急性出血性事象に対応する万能型血小板輸血剤の開発		京都大学 江藤 浩之

地域社会における安全構築等に関する活動及び研究

	テーマ	団体・研究者名
活動	SIDS(乳幼児突然死症候群)研究セミナー	LSFA乳幼児応急手当普及会
	ラダー・レスキュー・システム講習会(梯子を使った救助方法)	特定非営利活動法人 ジャパン・タスクフォース
	災害発生時にも対応できる、野外救急法(WFA)を実践的に学ぶ講習の開催	特定非営利活動法人 体験学習ネットワーク
	災害救助犬の育成事業	特定非営利活動法人 日本レスキュー協会
特別枠	東北被災地の障害者作業所物品の尼崎での販売による支援活動	特定非営利活動法人 尼崎障害者センター
	被災地でこそ、楽しい学びと知的体験を! ボランティアの可能性をひろげる自然科学系体験プログラムの開発と実施	特定非営利活動法人 大阪自然史センター
	被災地での民泊による観光受け入れ整備支援ツアーの実施	大阪大学災害ボランティアサークルすずらん
	巨大地震災害対応と雇用創出に関するセミナー開催	一般社団法人 キャッシュ・フォー・ワーク・ジャパン
	双葉町応援隊-KIZUNA- 被災地と心をつなぐ	京丹波町スポーツ少年団
研究	つなぐ~災害被災地の団体として、東日本大震災の被災地域の非営利団体に経験をつなぐ	兵庫県移送サービスネットワーク
	宮古MAPでつながろう! 「宮古の人たち×関西の大学生」プロジェクト	立命館大学 宮古市ボランティア団体 R7
	介護安全のための組織基盤としてのチーム構築に関する研究	兵庫県立大学 小山 秀夫
	交通事故予知回避を目指した脳磁図研究	大阪市立大学 田中 雅彰
	小学校における心肺蘇生教育の現状と小学生の可能性を広げる	京都橘大学 千田 いすみ
	発達障害・自閉症の子どもへの事故予防教育に関する研究	兵庫医科大学 堀 清和

第5回連続講座「『いのち』を考える」～あなたにとって『いのち』とは～

平成26年度も様々な分野の講師をお迎えし、多様な観点から『いのち』に焦点を当て、ともに考える連続講座を開催いたします。今年度は、連続6週の講座を年3回(春季・秋季・冬季)開催いたします。どうぞご期待ください。

(※敬称略)

 <p>1 5月16日(金) 山田 邦男 大阪府立大学名誉教授</p>	 <p>2 5月23日(金) 小達 一雄 (財)夏目雅子ひまわり基金理事長</p>	 <p>3 5月30日(金) 柏木 哲夫 金城学院学院長、淀川キリスト教病院理事長</p>
<p>「それでも人生にイエスと言う」</p>	<p>勇気の中にあなただがいる ～生きること、伝えたいこと～</p>	<p>使命と運命</p>
 <p>4 6月6日(金) 玉木 幸則 西宮市社会福祉協議会 障害者総合相談支援センターにしのみやセンター長</p>	 <p>5 6月13日(金) 清水 康之 特定非営利活動法人 自殺対策支援センター・ライフリンク代表</p>	 <p>6 6月20日(金) 小山 明子 女優、エッセイスト</p>
<p>「生まれてきてよかった ～誰もが安心できる共生のまちづくり～」</p>	<p>安心して悲しむことのできる社会へ</p>	<p>妻として・女優として ～夫・大島渚と過ごした日々～</p>

※第5回連続講座の募集は終了しております。たくさんのお申込みありがとうございました。

平成26年度事業のご案内

「安全で安心できる社会づくり」の実現に向けて、地域における連携やつながりをより強く意識しながら、引き続き、事故、災害に対する備えや、被害に遭われた方々への心身のケアに関する支援に繋がる事業を進めてまいります。

1. 心身のケアに関わる事業

- 連続講座「『いのち』を考える」～あなたにとって『いのち』とは～
今年度は、連続6週の講座を年3回(春季・秋季・冬季)開催します。(春季の詳細は上記参照)
- 「いのちのセミナー」
一人ひとりが『いのち』と向き合い、「生きる力」を得ることができるようなセミナーを開催します。
- グリーフケアに関わる人材養成講座への助成
専門職やボランティアとしてグリーフケアの実践に携わる人材養成を目的として、大阪で開講される上智大学グリーフケア研究所の人材養成講座に対し助成を行います。

2. 地域社会の安全構築に関わる事業

- 「安全セミナー」の開催
今年度は年間2回に拡大し、「ヒューマンファクター」及び「防災」をテーマに開催します。

- 「救急フェア」「救9の日 エキデモAED」
今年度も近畿2府4県のJRの駅を中心に、初期救護の重要性を啓発する活動を実施します。(詳細はP5参照)
- 新たな手法による初期救護の更なる普及啓発
新たに、初期救護の重要性に関する普及活動を行う団体等に、AEDトレーナー及び訓練人形を提供することで、更なる普及啓発を図ります。
- 「安全で安心できる社会」の実現に関わる事業
- あしなが育英会への助成
「高校奨学生のつどい」及び小中学生を対象とした「キャンプのつどい」への助成
- 関西いのちの電話、神戸いのちの電話への助成
ボランティア電話相談員のスキルアップやメンタルケアへの助成

4. 公募助成事業

- 平成27年度公募助成(活動・研究)
- 第4回公募助成活動発表会の開催

編集後記

新生活の行事も一通り終わり、新緑が眩しい時期がだんだんと近づいてまいりました。新しい年度に入り、Reliefの表紙をおもいきりリニューアルいたしました。平成26年度も、より多くの方に手にとっていただける広報誌になるよう、心をこめて誌面をつくっていきたく思います。Reliefの発行は年4回です。ぜひ、毎号チェックしてみてくださいね。(編集者：川股)

〒530-8341 大阪市北区芝田二丁目4番24号
TEL: 06-6375-3202 FAX: 06-6375-3229
E-mail: info@jrw-relief-f.or.jp
URL: http://www.jrw-relief-f.or.jp/